

社会・経済を比較する(その九)

盛田 常夫

「オルバン・小泉」 カリスマ現象を解く ― 左翼の消滅と保守の分裂

東西に共通する現象

ソ連・東欧社会主義の崩壊以後、旧社会主義国だけでなく、いわゆる資本主義国でも政治・思想的状況に奇妙な混乱が見られる。それは社会主義国家とそのイデオロギーの消滅にともなう保守の分裂である。

旧社会主義国では旧支配層の改革勢力が、資本主義経済推進の担い手に変身した。これにたいして、旧左翼人脈による支配の続行を嫌う人々は、「旧左翼」に対抗する政策を掲げることを余儀なくされた。本来、市場経済の擁護は保守の政策だが、旧左翼がこの政策を推進するために、保守勢力は左翼の典型的主張であった国营企業の国家所有維持を政策に掲げること、政治的な対抗軸を作らざるを得なくなった。これで政治地図の捻れ現象が発生した。

「左」が旧右翼の政策を推進し、「右」は旧左翼の政策を主張する。ハンガリーの「右派」とされるFIDESZは、「コミニストが民営化を推進して国の資産を外国に売っている」と批判し、自らの存在をアピールしてきた。この批判は二つのこと、つまり「旧コミニスト批判」と「民営化批判」を一つにまとめた。このために、論理的な矛盾に満ちている。しかし、旧体制

を知らない多くの若者には論理的矛盾などどうでもよい。「旧コミニストは悪者」という印象が醸成されれば、政治的に成功なのである。この「分かり易さ」がオルバン崇拜現象を生み出した。

他方、日本はどうか。左翼勢力の弱体化によって、保守と革新の対抗軸は保守勢力の中に作られることになった。民営化推進による国家管理の打破(規制緩和)を唱える小泉首相は革新勢力で、それに対抗する勢力は抵抗保守勢力という図式が出来上がった。明らかに、対左翼への対抗軸を失った日本では、社会の現実的利益が保守勢力内部の力関係に反映され、旧保守が現状革新と抵抗保守に分裂した。「郵政民営化はアメリカ資本の露払い」という主張は、FIDESZの主張と似通っている。

保守を統合する思想やイデオロギーが現実的な意味を失ったことも、このような保守の分裂を引き起こした。戦前の日本では天皇制国家思想で保守をまとめることができたが、戦後の形骸化された君主制はあまりに弱く、保守を統合する旗印にならない。堅固な保守イデオロギーが失われた戦後は対「左翼」が保守をまとめる座標軸だったが、旧左翼の崩壊とともに、時代を捉える保守イデオロギーの欠如が明々白々となった。今、広い意味での日本の保守勢力をかくらうじて繋いでいるものが「靖国」であり、対中国・韓国にたいするナショナリズムなのである。しかし、これを支えるイデオロギーは脆弱で、これによって結ばれる絆はきわめて緩い。

保守の混乱は時代を映す

オルバンの反民営化愛国主義と反コミニズム、小泉首相の民営化推進と靖国参拝や対中・韓強行姿勢は一

思想がない。これが日本の保守の現状である。ハンガリーの保守にも、反コミニズムと愛国心に代わる創造的な保守の思想が欠如している。時代が思想的な過渡期に入っているということだ。

カリスマの脆弱性

一九九八年の総選挙以後、オルバンとFIDESZが意識的に採用したのが、党首オルバンへの個人崇拜である。この手法は社会主義国で使われたスターリン(各国の小スターリン)への個人崇拜と本質的に同じである。議会ではなく、街頭行動に政治的な圧力手段を求めるといっても、旧共産党の手法である。このように、保守を自認するFIDESZが旧共産党の政治手法を採用した。党内でオルバンに代わりうる人材を追い落とす策動も、まさにソ連共産党のボルシェヴィキ的手法そのものである。こうして、オルバンは存在しない「コミニスト社会党」批判を展開し、自らはボルシェヴィキ党の戦術を使うという自家撞着に陥っている。こうした矛盾にもかかわらず、オルバンは若者の人気を獲得している。非常に奇妙な社会現象である。明らかに、若者にとってイデオロギーの内容は二の次で、頼もしいカリスマがいることが重要なのだ。

同じことは小泉人気にも言える。小泉改革の内容に関係なく、自己主張を明確にして、既定方針を突っ走る強い個人が魅力的なのだ。これは複雑で身動きできない閉塞状況にある社会の中で、自分に代わって勇ましく前進してくれる個人を熱狂的に支持する現象としか考えられない。これだけ時代が進んでも、いやそれだからこそ社会の中の個人の自立はいろいろな条件に制約されている。だから、自らに代わってこの制約を乗り越え、自らの欲求を実現してくれる人が必要なのだ。

見すると正反対のように見えるが、この二つの現象には共通の特質がある。旧左翼と旧右翼の崩壊、新しい革新と古い保守との対立、保守イデオロギーの混乱、この混乱を統一しようとするナショナリズムとポピュリズム、それを先導する個人的カリスマ現象。これらは奇妙なほどに二つの政治現象に共通している。

一方では、「右派」のアイデンティティを保つために、政治的「枕詞」としてイデオロギー的な「左派」批判が必要になる。オルバンは社会党をコミニストとして批判することで自らの陣営のアイデンティティを確認しようとする。日本の「右派」も対「左翼」批判によって、統一アイデンティティを獲得しようとする。ところが、すでに批判対象が消滅している。旧来のコミニストも「左翼」も、もうどこにも存在しない。ここにこのイデオロギー批判の脆弱さがある。存在しないものを批判することの虚(むな)しさに気づき始めると、「右派」の分裂が始まる。

他方では、この空虚な左翼批判を補うために、「愛国主義」イデオロギーが必要になる。オルバンが在外ハンガリー人を見捨てる「左派」は「非国民」の政党だと主張し、小泉首相は「非国民」の「自虐史観」を排し、意識的に靖国参拝を続けることで、党内保守派のイデオロギー的な絆を保持しようとする。共通するのは、外に向かつてアイデンティティを主張して、国内の保守勢力をまとめようとする手法である。教育基本法に「愛国心」を盛り込もうとする試みも、保守の拠り所を求めようとする模索に他ならない。

このように、現「保守」勢力のイデオロギーは、存在しない敵にたいする虚しい対抗軸を、「民族主義」や「愛国主義」という昔からの陳腐な国家主義的思想で補強しようとする。ところが、国を愛すると言っても実体がないそれが代理充足を実現するカリスマ崇拜だ。しかし、この種の個人崇拜の基礎はきわめて弱い。それぞれのカリスマには確固とした思想やイデオロギー的な基礎がない。だから、カリスマ人気がどれほど強くても、それで社会を掌中に収めることはできない。ここがスターリン時代や天皇制国家時代との違いである。オルバンも小泉も、もう一時の勢いを失ってしまった。この個人崇拜を支える社会集団は、オルバンや小泉がいなくなれば、また別の者にカリスマを求めることになる。インチキ宗教の指導者に騙される社会的基礎がある。人類の歴史がこれほど進んでも、人々の心情は他力本願の不条理から解放されることはない。

消滅した左翼

旧左翼が理論的な確信を失い、アイデンティティを喪失しているのは保守と同じである。明らかに、理論面でも百年一日のごとくマルクス理論に過度なまでに依存し、現実分析では現存していた「社会主義国家」の鋭利な分析を放棄してきた精神的怠惰の結果である。自分の頭で現実を分析する用具を磨いてこなかったマルクス理論陣営は、社会主義の崩壊とともに、再起不能なまでに打ちのめされてしまった。

明らかに、新しい時代に即した歴史的大局理論の構築が求められる。それは市場経済の論理を土台にしつつ、市場と資本の限界を明確にし、社会的公正を目指す社会理論として再構築されなければならないだろう。しかし、旧左翼のイデオログでそのような理論的な営みを行っている論者を知らない。ここにも、時代の混乱が見られる。

旧左翼も旧右翼も、社会経済の大変動を眼前に、立ち往生しているというのが現実だ。

い。国旗や君が代の強制は虚しい。国歌・国旗の形式を、「愛国」の内容で埋めたいというのが本音だろう。しかし、天皇制軍国主義時代ならいざ知らず、今の時代に学校で教えられる「愛国心」など存在しない。

ハンガリーのEU加盟が実現した年に在外ハンガリー人の二重国籍付与が国民投票にかけられるというのも時代に逆行しているが、グローバルゼーションが進んでいるこの時代に、「愛国主義」を強調しようとするという日本の保守も時代錯誤(アナクロ)だ。

「外国から言われて、参拝を止めるのはおかしい」という子供のような抵抗論理も可笑しい。アメリカに軍事的に従属し、アメリカの世界戦略と費用負担要求を無条件で受け入れている政治や政治家は、日本国の自立や愛国に背いてはいないか。そういう人たちが、中韓に対してだけ強行に国益を主張するのは、ナシヨナリズムとしても一貫性を欠いている。外国から言われようが言われまいが、自らの姿勢を正すことが大切なのではないか。

要するに、本音は一つだけ。「侵略戦争を認めては「左翼」と同じになる。「あの戦争は悪くなかった、自衛戦争だった」という最後の抛り所がなくれば、保守を統一する絆が切れてしまう。しかし、対外的には「侵略戦争ではなかった」とは口が裂けても公言できない。だから、歪(いびつ)な靖国集団参拝という示威行動が生まれる。首相であれ、国会議員であれ、靖国参拝は政治行動であって、「心の問題」などという抽象的なものではない。国内問題で割れる保守が、対外的なナシヨナリズムでかくらうじて一体感を保持しているのだ。その代償として、日本のアジア外交が空白になってしまった。国内革新、対外保守が小泉政権の特徴である。

旧来の天皇制国家的思想に代わる創造的な保守の